

「空の墓」伝承を巡る一考察

—マルコとヨハネの物語から—

土 居 由 美

1. はじめに

キリスト教信仰の根幹である復活信仰の基層に復活伝承がある。この復活信仰の最古の伝承の形は、パウロの書簡コリントの信徒への第一の手紙第15章に記されたケリュグマという定式化された表現の中に留められている。他方、福音書において復活伝承は「空の墓」の逸話と結びついて描かれる。「空の墓」の逸話とは、磔刑による死の後に埋葬されたイエスの墓が死後三日目には空になっていた、言い換えれば墓からイエスの遺体がなくなっていたと報告される伝承である。

本稿においては、現行の福音書に留められた逸話からこの「空の墓」伝承の古層について辿り、後に復活伝承について考察する際の基礎作業の一助としたい。

2. 方法

新約聖書四福音書の資料及びその系統と相互の依存関係の詳細については紙面を他に譲らざるを得ないが、ここでは基本的に、二資料仮説に基づいて、マルコ、マタイ、ルカ三つの共観福音書には相互に資料上の依存関係があり、他方ヨハネ福音書には基本的に他の福音書と資料上の依存関係がないものと想定する立場をとる。その上で、先の共観福音書の中の最古のものであるマルコ福音書とヨハネ福音書相互に共に登場し、内容が類似する逸話に関して、共通した古層の伝承の存在が想定されるものと考えることとする。この前提に従って、先に述べた「空の墓」伝承について、マルコ福音書及びヨハネ福音書相互の現行のテキストから、古層の伝承を想定してゆく。そのための具体的な手続きとして最初に、同物語が描かれた箇所、マルコ及びヨハネ双方のテキストをギ

ロシア語原文及び日本語訳において、対置して記す。次いで、両テキストにおいて共通する若しくは密接に類似する語彙及び文言が現れる部分について印を付して示し、これから古層の伝承に含まれた文言と想定され得る箇所を仮のものとして提示する。その後、「空の墓」伝承について若干の考察を加えてゆく。

3. テキスト

既に述べたように、以下においてマルコ及びヨハネ福音書双方に描かれた「空の墓」のエピソード部 (Mk16:1-8/Jh20:1-18) テキストを、原文ギリシア語とその翻訳とにおいて共に左右に対置して示す。なお、網掛け及び点線による下線は筆者が付したものである。

「空の墓」(Mk16,1-8/Jh20,1-18) の逸話¹

<p>16:1 Καὶ, διαγενομένου τοῦ σαββάτου Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ καὶ, Μαρία ἡ [τοῦ] Ἰακώβου καὶ Σαλώμη ἠγόρασαν ἀρώματα ἵνα ἐλθοῦσαι ἀλείψωσιν αὐτόν.</p> <p>さて、安息日が終わり、マグダラの女マリヤとヤコブのマリヤとサロメは、イエスに塗油を施しに行こうとして香料を買った。</p>	
<p>16:2 καὶ λίαν πρῶτὴ τῆ μιᾶ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.</p> <p>そして、週の始めの日、朝たいへん早く、日の上る頃、彼女たちは墓へ行く。</p>	<p>20:1a Τῇ δὲ μιᾶ τῶν σαββάτων Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ ἔρχεται πρῶτὴ σκοτίας ἐτι οὐσης εἰς τὸ μνημεῖον</p> <p>週の初めの日のこと、マグダラのマリヤが早朝、まだ闇であるうちに墓へやって来る。</p>
<p>16:3 καὶ ἔλεγον πρὸς ἑαυτάς· τίς ἀποκυλίσει ἡμῖν τὸν λίθον ἐκ τῆς θύρας τοῦ μνημείου;</p>	

1 テキストは、ギリシア語原文について、Nestle Aland, Das Neue Testament griechisch und Deutsch, Deutsche Bibelgesellschaft katholische Bibelanstalt 2000 から、日本語訳について、新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2011年から引用した。なお、本稿におけるこれ以降の箇所における聖書本文の引用も同様だが、部分的に、『新共同訳聖書』日本聖書協会 1993 も用いる。

<p>そこでお互いに言い続けた、「誰が私たちのために、墓の入口からあの石を転がしてくれるでしょう」。</p>	
<p>16:4 καὶ ἀναβλέψασαι θεωροῦσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος· ἦν γὰρ μέγας σφῶδρα. しかし目を挙げて見ると、なんとその石がすでに転がしてあるのが見える。というも、〔その石は〕ひどく大きかったのである。</p>	<p>20:1b καὶ βλέπει τὸν λίθον ἡρμένον ἐκ τοῦ μνημείου. そして、あの石が墓から取り除かれているのを目にする。</p>
	<p>20:2 τρέχει οὖν καὶ ἔρχεται πρὸς Σίμωνα Πέτρον καὶ πρὸς τὸν ἄλλον μαθητὴν ὃν ἐφίλει ὁ Ἰησοῦς καὶ λέγει αὐτοῖς ἦραν τὸν κύριον ἐκ τοῦ μνημείου καὶ οὐκ οἶδαμεν ποῦ ἔθηκαν αὐτόν. そこで、走って、シモン・ペトロともう一人の、イエスがほれこんでいたあの弟子のところに来て、彼らに言う、「彼らが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、私たちにはわかりません」。</p>
	<p>20:3 Ἐξῆλθεν οὖν ὁ Πέτρος καὶ ὁ ἄλλος μαθητὴ καὶ ἦρχοντο εἰς τὸ μνημεῖον. そこで、ペトロとあのもう一人の弟子は出かけて行き、墓に行こうとした。</p>
	<p>20:4 ἔτρεχον δὲ οἱ δύο ὁμοῦ καὶ ὁ ἄλλος μαθητὴς προέδραμεν τάχιον τοῦ Πέτρου καὶ ἦλθεν πρῶτος εἰς τὸ μνημεῖον. 二人は一緒に走っていたが、例のもう一人の弟子はペトロよりも速く、先に走り、〔一足〕先に墓へ来た。</p>
	<p>20:5 καὶ παρακύψας βλέπει κείμενα τὰ ὀθόνια, οὐ μέντοι εἰσῆλθεν. そして、かがみこんでみると、あの亜麻の布切れのあるのが目に入る。しかし、入ることはしなかった。 20:6 ἔρχεται οὖν καὶ Σίμων Πέτρος ἀκολουθῶν αὐτῷ καὶ εἰσῆλθεν εἰς τὸ μνημεῖον, καὶ θεωρεῖ τὰ ὀθόνια κείμενα.</p>
	<p>さて、彼に続いてシモン・ペトロもやって来る。そして、彼は墓の中に入った。そ</p>

	<p>して彼が看ると、あの亜麻の布切れがある、</p> <p>20:7 καὶ τὸ σουδάριον, ὃ ἦν ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ, οὐ μετὰ τῶν ὀθονίων κείμενον ἀλλὰ χωρὶς ἐντετυλιγμένον εἰς ἓνα τόπον.</p> <p>また、彼の頭のところにあった、あの汗ふき布は、亜麻の布切れと一緒にあるのではなく、別の離れたところで一つの場所にまるめられている。</p>
	<p>20:8 τότε οὖν εἰσῆλθεν καὶ ὁ ἄλλος μαθητὴς ὁ ἐλθὼν πρῶτος εἰ τὸ μνημεῖον καὶ εἶδεν καὶ ἐπίστευσεν·</p> <p>さてその時、先に墓に来た、あのもう一人の弟子も入って来た。そして、見て、信じた。</p>
	<p>20:9 οὐδέπω γὰρ ᾔδεισαν τὴν γραφὴν ὅτι δεῖ αὐτὸν ἐκ νεκρῶν ἀναστῆναι.</p> <p>つまり彼が死人の中から甦らなければならぬという聖書が、彼らにはまだわかっていなかったのである。</p>
	<p>20:10 ἀπῆλθον οὖν πάλιν πρὸς αὐτοὺς οἱ μαθηταί.</p> <p>それで、この弟子たちはまた自分たちのところに帰って行った。</p>
<p>16:5 Καὶ εἰσελθοῦσαι εἰς τὸ μνημεῖον εἶδον νεανίσκον καθήμενον ἐν τοῖς δεξιοῖς περιβεβλημένον στολὴν λευκὴν, καὶ ἐξεθαμβήθησαν.</p> <p>そして墓の中に入ると、彼女たちは白い長衣をまとった一人の若者が右側に座っているのを見、ひどく肝をつぶした。</p>	
<p>16:6 ὁ δὲ λέγει αὐταῖς· μὴ ἐκθαμβήσθε· Ἰησοῦν ζητεῖτε τὸν Ναζαρητὸν τὸν ἐσταυρωμένον· ἠγέρθη, οὐκ ἔστιν ὧδε· ἴδε ὁ τόπος ὅπου ἔθηκαν αὐτόν.</p> <p>すると彼は彼女たちに言う、「[そのように] 肝をつぶしてはならない。あなたたちは十字架につけられた者、ナザレ人イエスを探している。彼は起こされた、ここにはいない。見よ、ここが彼の納め</p>	

<p>られた場所だ。</p> <p>16:7 ἀλλὰ ὑπάγετε εἶπατε τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ καὶ τῷ Πέτρῳ ὅτι προάγει ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν· ἐκεῖ αὐτὸν ὄψεσθε, καθὼς εἶπεν ὑμῖν.</p> <p>むしろ行って、彼の弟子たちとペトロと言え、『彼はあなたたちより先にガリラヤへ行く。そこでこそ、あなたたちは彼に会うだろう』と。彼が〔かねて〕あなたたちに語った通りである』。</p>	<p>20:11 Μαρία δὲ εἰστήκει πρὸς τῷ μνημείῳ ἔξω κλαίουσα. ὡς οὖν ἔκλαιεν, παρέκτυπεν εἰς τὸ μνημεῖον</p> <p>他方、マリヤの方は、墓のところで、泣きながら外に立っていた。そして、泣いているうちに、ふと墓の方に身をかがめてみた。</p> <p>20:12 καὶ θεωρεῖ δύο ἀγγέλους ἐν λευκοῖς καθεζομένου, ἓνα πρὸς τῇ κεφαλῇ καὶ ἓνα πρὸς τοῖς ποσίν, ὅπου ἔκειτο τὸ σῶμα τοῦ Ἰησοῦ.</p> <p>そして彼女が看ると、イエスの体のあったところに、白衣の御使いが二人、一人は頭のところに、一人は足のところに座っている。</p> <p>20:13 καὶ λέγουσιν αὐτῇ ἐκέννοι· γύναι, τί κλαίεις; λέγει αὐτοῖς ὅτι ἦραν τὸν κύριόν μου, καὶ οὐκ οἶδα ποῦ ἔθηκάν αὐτόν.</p> <p>この〔御使いたち〕が彼女に言う、「女よ、何を泣いているのか」。彼らに言う、「彼らが私の主を取り去ったのです。どこに置いたのか、私にはわからないのです」。</p> <p>20:14 ταῦτα εἰποῦσα ἐστράφη εἰς τὰ ὀπίσω καὶ θεωρεῖ τὸν Ἰησοῦν ἐστῶτα καὶ οὐκ ᾔδει ὅτι Ἰησοῦς ἐστίν.</p> <p>これらのことを言ってから、後ろを振り返ってみた。そして、彼女が看ると、イエスが立っている。しかし、イエスであることがわからなかった。</p> <p>20:15 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς· γύναι, τί κλαίεις; τίνα ζητεῖς; ἐκείνη δοκοῦσα ὅτι ὁ κηπουρός ἐστίν λέγει αὐτῷ κύριε, εἰ σὺ ἐβάστασας αὐτόν, εἰπέ μοι ποῦ ἔθηκας αὐτόν, καὶ γὰρ αὐτὸν ἀρῶ.</p> <p>イエスが彼女に言う、「女よ、何を泣いているのか。誰を求めているのか」。こ</p>
--	---

	<p>の女は、それが庭師だと思いきこんでいたので、彼に言う、「あの、あなたが彼を運び去ったのでしたら、彼をどこに置いたのか私に言って下さい。そうすれば、この私が彼をいただきます」。</p> <p>20:16 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς Μαριάμ, στραφεῖσα ἐκεῖνη λέγει αὐτῷ Ἑβραϊστί· ραββουνι (ὃ λέγεται διδάσκαλε).</p> <p>イエスが彼女に言う、「マリヤム」。この女は振り向きざまに彼に言う、ヘブライ語で「ラップーニ」と。これは（「先生」という意味である。）</p> <p>20:17 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς· μὴ μου ἄπτου, οὐπω γὰρ ἀναβέβηκα πρὸς τὸν πατέρα· πορεύου δὲ πρὸς τοὺς ἀδελφούς μου καὶ εἰπέ αὐτοῖς· ἀναβαίνω πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ πατέρα ὑμῶν καὶ θεὸν μου καὶ θεὸν ὑμῶν.</p> <p>イエスが彼女に言う、「私にしがみつくのはよしなさい。私はまだのぼって父のところにいるわけではないのだから。私の兄弟たちのところへ行きなさい。そして彼らに言いなさい、『私は、自分の父のところ、あなたたちの父のところ、私の神のところ、あなたたちの神のところに、のぼってゆこうとしている』と」。</p>
<p>16:8 καὶ ἐξεληθῶσαι ἔφυγον ἀπὸ τοῦ μνημείου, εἶχεν γὰρ αὐτάς τρόμος καὶ ἔκστασις· καὶ οὐδενὶ οὐδὲν εἶπαν· ἐφοβοῦντο γάρ. [[πάντα δὲ τὰ παρηγγελμένα τοῖς περὶ τὸν Πέτρον συντόμως ἐξήγγειλαν. Μετὰ δὲ ταῦτα καὶ αὐτὸς ὁ Ἰησοῦς ἀπὸ ἀνατολῆς καὶ ἄχρι δύσεως ἐξαπέστειλεν δι' αὐτῶν τὸ ἱερὸν καὶ ἄφθαρτον κήρυγμα τῆς αἰωνίου σωτηρίας. ἀμήν.]]</p> <p>しかし、彼女たちは外に出るや、墓から逃げ出してしまった。震え上がり、正気を失ってしなつたからである。そして、誰にもひとことも言わなかつた。恐ろしかったからである。</p>	<p>20:18 ἔρχεται Μαριάμ ἡ Μαγδαληνὴ ἀγγέλλουσα τοῖς μαθηταῖς ὅτι ἑώρακα τὸν κύριον, καὶ ταῦτα εἶπεν αὐτῇ.</p> <p>マグダラのマリヤは来て、弟子たちに「私は主を見ました」[と云い]、そしてこれらのことを自分に言つたと告げる。</p>

上記テキスト部にみられるように、「空の墓」のエピソードについて、マルコ福音書とヨハネ福音書を比べると、マルコの方が短くヨハネの方が長く、ヨハネにおいてはマルコに比して、特に後半部において相当に物語が膨らんでいることがわかる。即ち、ヨハネにおいて「空の墓」伝承はマルコ福音書よりも更に拡大され、同福音書において固有かつ必要な意味づけが多くなされている。他方、これら双方の「空の墓」の物語の共通部は簡潔な内容となっているといえるが、それらを明白に認識するために、ここでまずは双方の物語の概要を要約してみたい。

4. 概要

先に述べた通り、ここでは以下に相互の「空の墓」の物語の概要を記し、次いで双方に共通する部分及び極めて類似する部分と相違する部分とを分けて示す。

(1)マルコ「空の墓」の物語概要

イエスが埋葬された直後の安息日が終わった週の初めの日、マグダラの女マリヤとヤコブのマリヤとサロメが香料を買い、早朝日の上る頃、イエスが埋葬された墓へ行った。墓の入口は大きな石で塞がれていたもので、その石をどのようにして取りのけようかと話しながら彼女らが墓へ着くと、その大きな石は既に転がしてあり、墓の入口は開いていた。彼女らが墓の中に入ってみると、そこには白い長衣を来た若者が座っており、彼女らに言った。「彼は起こされた。ここにはいない。行って彼の弟子たちとペトロに、彼はあなたたちより先にガリラヤに行く、そこで彼に出会おうだろう。」しかし、恐ろしかったので、彼女らは外に出るや墓から逃げて行き、誰にもひとことも言わなかった。

(2)ヨハネ「空の墓」の物語概要

イエスが埋葬された直後の安息日が終わった週の初めの日、マグダラのマリヤが早朝まだ闇であるうちに墓へ言った。彼女は墓の入口の石が取り除けてあったのを目にし、シモン・ペトロともう一人のイエスが惚れ込んでいた弟子のところに来て、「彼らがイエスを墓から取り去りました。どこに置いたのか私たちにはわかりません。」と告げた。そこで、ペトロともう一人のイエスが

惚れ込んでいた弟子が墓に行き、中に入った。そして、墓の中が空になっており、イエスの遺体がくるまれていた亜麻布だけがくるめられて置かれているのを見た。しかし、「彼が死人の中から甦らなければならないという聖書が彼らにはまだわかっていなかった」ので、彼らはまた自分たちのところへ帰っていった。他方、マリヤは墓の外に泣きながら立っていた。ふと墓の方に身をかがめると、イエスの身体があったところに、白衣の御使いが二人いて、彼女に「何故泣いているのか」と聞いた。マリヤが「彼らがイエスを取り去ったのです。どこに置いたかわからないのです。」と答え、後ろを振り返るとイエスが立っていた。しかし、彼女はそれがイエスだとわからなかった。イエスが「マリヤム」²と言うと、女は振り向きながら「ラップーニ」³と言った。イエスはマリヤに、「私にしがみつくのはよしなさい。兄弟たちの所へ行って、私は神のところへのぼって行こうとしていると言いなさい。」と言った。マグダラのマリヤムは弟子たちのところに行き、そのことを告げた。

(3)共通する内容

上記の概要からわかるように、両者に共通する内容は次の通りである。

“イエスの埋葬直後の安息日が終わった週の初めの日、女性（たち）がイエスの墓に行った。すると墓の入口を塞いであった大きな石が取り除かれてあり、イエスの遺体が消えていた。”

このエピソード全体に比して、極めて簡潔な内容のみが共通しているといえる。

(4)相違する内容

では、両者において相互に相違する内容はどのようなものか、以下に要約する。

マルコではその後、女性たちが墓の中に入ってみると、そこに白い長衣を来た若者が座っており、「彼は起こされた。ここにはいない。行って彼の弟子たちとペトロに、彼はあなたたちより先にガリラヤに行く、そこで彼に出会おう。」と告げたが、彼女らは外に出るや墓から逃げて行き、恐ろしかったの

2 「マリヤ」のヘブライ語による音読。

3 「先生」の意。

で誰にもひとことも言わなかった。

ヨハネではその後、これを見たマグダラのマリヤムが、シモン・ペトロともう一人のイエスが惚れ込んでいた弟子のところに来て、イエスの遺体が墓から消えていることを告げた。そこで、ペトロともう一人の弟子は墓に行き、空になった墓を見、その後、また自分たちのところへ帰っていった。他方、マリヤムは墓の外に泣きながら立っていたが、ふと後ろを振り返るとイエスが立っていた。しかし、彼女はそれがイエスだとわからなかった。イエスはマリヤに、「兄弟たちの所へ行って、私は神のところにのぼって行こうとしていると言いなさい。」と言った。マグダラのマリヤムは弟子たちのところに行ってそのことを告げた。

(5)相違する内容について

ここでは、双方に相違する内容について想定されてきたことについて述べてゆく。

マルコの「彼は起こされた。ここにはいない。行って彼の弟子たちとペトロに、彼はあなたたちより先にガリラヤに行く、そこで彼に出会うだろう。」と記された部分は、明確にマルコによる編集句とみなされるものであり⁴、言い換えれば「空の墓」伝承の古層には属さないものであると想定される。その後記される女性達の行動、即ち、女性たちはそれにも拘わらず、恐れに基づいてただ墓から逃げてゆき、誰にも何も言わなかったという記述については、ほぼ合理的説明は不可能だが、考え得る可能性としては、この唐突な記述による「空の墓」の物語の終えかたには、マルコ福音書独自の本来の編集方針が反映されている可能性も想定し得ると考えられる⁵。

4 ガリラヤという場所は、マルコ福音書においてイエスとその宣教活動を開始し、また弟子達を選んだ場所として記されている。この記述即ちガリラヤという場所への言及によって、読者はイエスの活動の出発点を、この物語部において再度想起するよう導入されているといえる。高橋虎/B.シュナイダー監修、川島貞雄/堀田雄康編集『新約聖書注解Ⅰ』日本基督教団出版局 1999 259 参照。

5 新約聖書翻訳委員会『新約聖書』岩波書店、2011 71 頁、脚注三参照。佐藤研『悲劇と福音』清水書院 2001 参照。この箇所は、この出来事が超自然的出来事であったことの衝撃を劇的に記述しているものとの捉え方も存在する。また、マルコ福音書は本来 16:8 で終わっていたのではなく、最後に復活したイエスの顕現について記された部分が存在していたが、その部分は何等かの理由で失われてしまった、またはマル

ヨハネ福音書の相違部に関しては、この部分においてまずマリヤム及びペトロともう一人の弟子によって「空の墓」が確認された後に、この部分におけるマリヤムへのイエスの顕現のエピソードを接合部として更にこれより以降に、「空の墓」の物語を超えて後の「十人の弟子たちへの顕現」(Jh20:19-23)、「トマスの反応」(Jh2:24-25)、「トマスを含む十一人の弟子たちへの顕現」(Jh20:26-29)、更には「ティベリアの海での顕現」(Jh21:1:14)⁶へと物語が展開されてゆく物語上の即ち編集上の構図が注目される。その構図の中でこの箇所には、ペトロとヨハネにおいて重要な人物である「あのもう一人の弟子」の行動が、ペトロの行動と交互に配置される。これらのデッサンから既にこの相違部は、ヨハネにおいて重要な人物、即ち「あのもう一人の弟子」を「空の墓」物語に描きこみながらイエスの顕現即ちイエスの復活物語を同福音書内最終部に展開して描いてゆくためのヨハネによる編集部としてみなすのが妥当であるといえる⁷。またここで、マリヤムによる「空の墓」の確認に加えて、ペトロともう一人の弟子による「空の墓」の確認が描かれていることは、本稿の考察にとっても一層暗示的であるといえるであろう。そこでペトロと「もう一人の弟子」が共に墓へと走ってゆくという描写の中で、「もう一人の弟子」の方が先に墓に到着すると記述され、その一方で、墓の中に最初に入ったのはペトロであると記述されるのだが、これはこの福音書において重要な人物である「もう一人の弟子」のペトロに対する優位性を示しつつも、恐らく既に初代教会において流布していた復活のイエスが現れた最初の人物としてペトロが伝え

コは更にこれ以降に叙述を展開する意向であったのだが、何等かの理由により、それが不可能となったと想定する研究者も存在する。これらの点につき、新共同訳『新約聖書注解Ⅰ』259参照。但し、マルコは後にこの句に続けて補遺Ⅰとして結びの句を書き加え、更に補遺Ⅱとして16:9-19に復活者の出現と顕現の物語を付加している。しかしながら、これら二つの補遺は語彙の面からも写本に関する諸検討からも、本来マルコに属するものでなかったことが明らかであると考えられている。

6 但し、ヨハネ21章は、錯簡構造として知られる章で、元来20章の後にあったものかどうかという点について議論がなされている章である。

7 イエスの顕現伝承の基本形として、(1)イエスの側からの顕現、(2)イエスの顕現を見たものの驚きと畏れ及び無理解、(3)イエス自身の口を通しての真相の提示、(4)これを受けての顕現を見た者の驚きと受容、(5)イエスによる弟子の派遣というパターンがあったのではないかと想定が存在する。この点について、新共同訳『新約聖書注解Ⅰ』526参照。

られていた伝承を考慮して描かれたものであると推測される⁸。先にも述べたように、このような重層的な「空の墓」の出来事の描写は、ヨハネ福音書において、後に描かれる物語のクライマックスである「イエスの顕現」言い換えれば「復活」描写の極めて効果的な伏線となっていることが明らかである。

5. テキスト共通部

次いでここでは以下に、前出のテキストからマルコ及びヨハネの「空の墓」のエピソード部に共通するテキスト部のみを取り出して、対置して示したうえで、この伝承のもつ意味合いについて更に考えることとする。なお、以下に記すテキストの網掛け及び点線による下線は筆者が付したものである。

<p>16:2 καὶ λίαν πρῶτὶ τῇ μιᾷ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.</p> <p>そして、週の始めの日、朝たいへん早く、日の上る頃、彼女たちは墓へ行く。</p>	<p>20:1a Τῇ δὲ μιᾷ τῶν σαββάτων Μαρία ἡ Μαγδαληνὴ ἔρχεται πρῶτὶ σκοτίας ἔτι οὐσῆς εἰς τὸ μνημεῖον</p> <p>週の初めの日のこと、マグダラのマリヤが早朝、まだ闇であるうちに墓へやって来る。</p>
<p>16:4 καὶ ἀναβλέψασαι θεωροῦσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος· ἦν γὰρ μέγας σφόδρα.</p> <p>しかし目を挙げて見ると、なんとその石がすでに転がしてあるのが見える。というのも、[その石は] ひどく大きかったのである。</p>	<p>20:1b καὶ βλέπει τὸν λίθον ἡρμένον ἐκ τοῦ μνημείου.</p> <p>そして、あの石が墓から取り除かれているのを目にする。</p>
<p>16:7 ἀλλὰ ὑπάγετε εἴπατε τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ καὶ τῷ Πέτρῳ ὅτι προάγει ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν· ἐκεῖ αὐτὸν ὄψεσθε, καθὼς εἶπεν ὑμῖν.</p>	<p>20:17 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς· μή μου ἄπτου, οὐπω γὰρ ἀναβέβηκα πρὸς τὸν πατέρα· πορεύου δὲ πρὸς τοὺς ἀδελφούς μου καὶ εἰπὲ αὐτοῖς· ἀναβαίνω πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ πατέρα ὑμῶν καὶ θεόν μου καὶ θεόν ὑμῶν.</p>

8 コリント人への第一の手紙 15:3-8 参照。「(3)最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、私も受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、(4)葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、(5)ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。(6)次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしろ、大部分は今なお生き残っています。(7)次いでヤコブに現れ、その後全ての使徒に現れ、(8)そして最後に月足らずで生まれたような私にも現れました。」引用は『新共同訳新約聖書』による。下線は筆者による。ここで、ケファはペトロを表す。

<p>むしろ行って、彼の弟子たちとベトロと言え、『彼はあなたたちより先にガリラヤへ行く。そこでこそ、あなたたちは彼に会うだろう』と。彼が〔かねて〕あなたたちに語った通りである。</p>	<p>イエスが彼女に言う、「私にしがみつくのはよしなさい。私はまだのぼって父のところにいるわけではないのだから。私の兄弟たちのところへ行きなさい。そして彼らに言いなさい、『私は、自分の父のところ、あなたたちの父のところ、私の神のところ、あなたたちの神のところに、のぼってゆこうとしている』と」。</p>
--	---

上述の箇所の中で、網掛けをした語彙がマルコ及びヨハネに共通するものであり⁹、点線による下線を付した箇所は、ほぼ共通する語彙である¹⁰。

6. 共通する古層の伝承のかたちへの検討

ここでは、マルコとヨハネに共通する箇所から更に、「空の墓」伝承の古層の形を想定してみたい。

(1) Mk16:2 と Jh20:1a から

<p>16:2 καὶ λίαν πρῶι τῆ μιᾶ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου. そして、<u>週の始めの日</u>、<u>朝たいへん早く</u>、<u>日の上る頃</u>、<u>彼女たちは墓へ行く</u>。</p>	<p>20:1a Τῆ δε. μιᾶ τῶν σαββατων Μαρια η Μαγδαληνη. ἔρχεται πρῶι σκοτιά ἐτι οὐσῆ εἰ το. μνημειον <u>週の初めの日</u>のこと、<u>マグダラのマリヤ</u>が<u>早朝</u>、<u>まだ闇であるうちに</u>墓へやってくる。</p>
--	--

この箇所で、マルコとヨハネに共通する語彙は、上記網掛け部である。

これらの中で、「週の初めの日」「墓へ行く / やってくる」は全く一致するといえる。また類似の語の中で、「日の上る頃」(MK)、「まだ闇であるうちに」(Jh) は、意味としてはほぼ同義であるといえる。しかし、「闇」という語がヨハネ福音書に特徴的で多用される語であり、また象徴的意味合いを含ませて用いられる語であることを考慮すると、この「闇」という単語に関しては、古層

9 ここでは語形変化が異なるものについても同一の語彙として扱う。

10 ほぼ共通する語彙とは、異なる単語や言い回しであっても同一の意味を成すものを指す。

の伝承にあった語をヨハネ著者が編集過程において置き換えたという可能性が想定される。そう考えると、「朝たいへん早く日の上る頃」(Mk)と「早朝まだ闇であるうちに」(Jh)の双方の表現が共に意味する同一の内容から、「朝大変早く日の上る頃」という表現が古層の伝承に近いものと想定され得る妥当性が高い¹¹。

ここで検討すべき単語は、「彼女たち」(Mk)と「マグダラのマリヤ」(Jh)だが、これについて、現行のテキストの記述に基づいて明確に古層の伝承において用いられていた表現を再構成することはほぼ不可能に近いといえる。しかしながら、どちらの表現により妥当性があるかという想定をするとすれば、「彼女たち」(Mk)という語を採用すべき妥当性が高いといえる。その理由としては以下のようなことが考えられる。例えば、この箇所続くJh20:2において、墓から弟子たちとのころへ走って行ったマグダラのマリヤが「彼らが主を墓から取り去りました。どこに置いたのか、私たちにはわかりません」と告げたと記されるこの言葉の中で、マグダラのマリヤの言葉として、「私たちにはわかりません」と一人称複数形が用いられている点が考慮される。この一人称複数形の表現の中に、もしかすると元来の伝承においては複数の女性が共に墓へ行ったりと伝えられていたものを、ヨハネ福音書著者が人物の個人化の傾向に基づいた独自の編集方針に従って、この逸話を元来の伝承を用いながら編集しなおしたことの痕跡が見られると想定することも可能であるかもしれない。また、先にも言及したように、ヨハネは後の箇所でもマグダラのマリヤの伝承を拡大しており、他方で、ペトロやもう一人の弟子の逸話も加えて更に伝承全体を「空の墓」エピソードから拡大しつつイエスの「復活エピソード」へと展開している。そのような文章の構造からここでも、先にも述べたようなヨハネ著者の編集上の傾向に沿うものとして、具体的な個人名を記すことがヨハネにとっては重要であったのではないかと想定される¹²。またより一般的な伝承

11 ただ、マルコにおいては、この説の直前の16:1を含めて、即ち16:1-2には編集の手が加えられていると考えられている。その理由としては、この16:1-2節において、「安息日が終わると」16:1という語句と「そして、週の初めの日の朝ごく早く」(16:2)と、時を示す記述が二重に重ねられており、このような二重の時の指示はマルコの典型的とみなされる故である。しかしながら、このような二重の記述が編集の痕を推測させるとはいえ、古層の伝承に基づいて編集の手が加えられているという想定は可能であるので、ここでは、16:2のヨハネの伝承部と共通する語句及び内容に基づいて、古層の伝承を想定することとする。

12 イエスの顕現物語について、Jh20では、マグダラのマリヤ-弟子達-トマス、Jh21

の発展上の傾向として、伝承が古いものから新しいものへと発展若しくは拡大される際には¹³、無記名から記名へと展開されることが多く¹⁴、そういった場合に記名される名前は、その伝承が溶け込ませられる物語全体の内容において意味を持たせられる固有の名前と結び付けられることが多いということも考慮される。更に、早朝のまだ闇であるほどの時刻に、女性がただ一人で墓へ行くということも通常の行動という観点からいえば、不自然であるといえるだろう。

他方、「彼女たち」というマルコの表現は古層の伝承として、一般的見地から不自然さが少ない。ここに敢えて女性の固有名詞が定められていないのも古層の伝承としてある意味で信憑性が高い。というのもマルコにおいては、この「空の墓」の逸話以前の埋葬記事（Mk15 :42-47）において記される女性達の名前「マグダラの女マリヤとヨセのマリヤ」が、この箇所直前 16 : 1 で記される女性達の名前において「マグダラの女マリヤとヤコブのマリヤとサロメ」と表記され、名前の提示について繰り返されつつも一致しないということから明らかに想定される編集上の錯綜から¹⁵、本来この伝承の古層には女性達の名前が記されていなかったかもしくはもともと錯綜して伝えられていたものに対して、マルコが具体名を編集して記したと想定される蓋然性が高いからである¹⁶。従来の研究においても、マルコにおけるここでの女性たちの名前のリストに関

では、ペトロと叙述されるが、このような描かれ方は、ヨハネ福音書に類出する個人化の特徴であるといえる。一般にヨハネ福音書においては共同体が後退し、個人が全面に出て来るといふ特徴があると認められており、これは終末論の現在化（イエスを信じる者は既に永遠の命を得ている即ち現在という時の中で既に救いが与えられている）に関係しているとも解釈される。『新約聖書注解 I』526 参照。

- 13 ヨハネ福音書は四福音書の中で、最も新しい時代（いずれも A.D.1 世紀終盤頃）に成立したとみなされている。
- 14 逆の場合もあり得る。例えば、福音書に認められる例に関していえば、具体的人物目が記されると、当時の社会的相関関係において差しさわりがあるような場合に、最初に存在したであろう人物名が後に無記名とされたり、曖昧な表現で記述されてゆくような場合がある。
- 15 そもそも、この箇所に記される女性の名前は、イエスの死の場所に居合わせた女性たちの名前 15:40 に合わせて創作されたものと想定される。また、15 : 40 もマルコの編集句であると想定される。これらの編集の意図は、読者に男性の弟子たちの逃亡と不在を印象づけるためであろうとの想定がなされる。『新約聖書注解 I』258 参照。
- 16 明確な個人名が知られていれば、それを入れ替えるのは、それを見聞した人がいるという状況においては極めて困難である。

しては、恐らくこれより前に記されるイエスの磔刑の際にその十字架のもとにいた女性たちの名前のリスト（Mk15:40）に合わせて創作された可能性が極めて高いとの想定が多数である¹⁷。

ただ、マルコにおいてもこの前後にマグダラのマリヤの名前が登場することは注目に値するといえる。しかしながらやはりここでの語彙という点から言えば、また特に女性たちがその後の補遺（Mk16:8b）で無記名であるのに対して、その後の更なる補遺（Mk16:9）の顕現物語においてマグダラのマリヤと記名されることも総合すると、マグダラのマリヤの名は、顕現復活伝承と結びついてはいても、「空の墓」伝承の古層とは結びついていなかったのではないかと想定されるべき蓋然性も高いといえるであろう。

従って、古層の伝承において、イエスの墓に赴いた女性たちは複数の婦人たちであったと想定するのが妥当であり、ここで古層の伝承に用いられていたと想定すべき語としては、「彼女たち」が適切であろうと考えられる。

なお、マルコの最初の語、「そして」は単純な接続詞であるのであってもなくともよいが省略してよいと考えられる。これらから、この箇所から、更に古層の伝承部を再構成するとすれば、以下のようなものではないかと思われる。

λίαν πρωὶ τῆ μιᾶ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.

週の初めの日、朝大変早く、彼女たちは墓へ行く。

(2) Mk16:4 と Jh20:1b から

<p>16:4 καὶ ἀναβλέψασαι θεωροῦσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος· ἦν γὰρ μέγας σφῶδρα. しかし目を挙げて見ると、なんとその石がすでに転がしてあるのが見える。というのも、〔その石は〕ひどく大きかったのである。</p>	<p>20:1b καὶ βλέπει τὸν λίθον ἠμμένον ἐκ τοῦ μνημείου. そして、あの石が墓から取り除かれているのを目にする。</p>
--	--

17 Bultmann, R., *Die Geschichte der synoptischen Tradition. Mit einem Nachwort von Gerd Theißen*, 10. Auflage, Vandenhoeck und Ruprecht, Göttingen 1995 308-320 他参照。Pesch R., *Der Schluß der vormarkinischen Passionsgeschichte und des Markusevangeliums* : Mk 15,42-16,8, in M. SABBE(Hrsg.), *L'Évangile selon Marc*, Gembloux, 1974 (BETL 34) 参照。

この箇所、共通する語彙は網掛け部であり、類似する語は点線による下線部である。

マルコの「目を挙げて見ると」という単語は考えて見れば不自然といえるかもしれない。即ち、何故墓の入口を見るのに目をあげなければならないのか。これは、その前の箇所で女性たちが墓の石をどうしようかと話し合っていたという描写があることから、このような相互に会話して墓の方は見ていなかったところから、墓の入口に視野を向けたというほどの意味合いとしてとるのが妥当かもしれないが、ここでイエスを改めて想起するという内面における意識の転換を示しているとも捉えられるであろう。

また、「転がしてある」(Mk)と「取り除かれてある」(Jh)では、多少意味合いが異なるといえる。「転がしてある」ということであれば、石は単に転がされて入口が開けられているのであって、入口の側のどこかにあるという意味として受け止められるが、「取り除かれてある」ということであれば、入口から単にとりのぞかれて脇にあるのか、この石自体が全く無くなっているのか判別できないが、両方の意味合いに採ることが出来つつ石が無くなっていたとの意味合いが一般的には強まるであろう。しかし、後者の意味にとるとすれば、そもそもこの石はどこに持っていかれたのか、このような大きな石をどのようにしてどこかに誰かが持ち去ったのかという更なる疑問が生じるといえるが、これに対する答えはどこからも与えられようがないばかりか、これに関する更なる逸話の展開や繋がりもどこにも見出すことが出来ない。つまりところこれらから、この語についてはどちらが伝承の古層により近いかということを判断することが出来ないといえる。しかしながら、より誤解の生じる可能性が少ない妥当な表現を仮に想定し採用するとするならば、上記から「転がしてある」(Mk)であると考えられてもよいであろう。なお、マルコの後半にある「というのも、〔その石は〕ひどく大きかったのである。」という表現は、マルコにおいて記された、「石が転がしてあった」という表現を補足し説明するものであり、ここでそのような説明が必要であったという観点から、先の「転がしてあった」という語の伝承上の信憑性も高まるともいえる。

これらのことを考慮して、この箇所の伝承の古層は以下のようなものであったのではないかと想定したい。

καὶ ἀναβλέπουσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος
 しかし、見るとその石が転がしてあるのが見える。

(3) Mk16:5 と Jh20:12 から

<p>16:5 Καὶ εἰσελθοῦσαι εἰς τὸ μνημεῖον εἶδον νεανίσκον καθήμενον ἐν τοῖς δεξιαῖς περιβεβλημένον στολὴν λευκὴν, καὶ ἐξεθαμβήθησαν. そして墓の中に入ると、彼女たちは 白い長衣をまとった一人の若者が右側に 座っているのを見、ひどく肝をつぶした。</p>	<p>20:12 καὶ θεωρεῖ δύο ἀγγέλους ἐν λευκοῖς καθεζομένους, ἕνα πρὸς τὴ κεφαλῇ καὶ ἕνα πρὸς τοῖς ποσίν, ὅπου ἔκειτο τὸ σῶμα τοῦ Ἰησοῦ. そして彼女が看ると、イエスの体の あったところに、白衣の御使いが二人、 一人は頭のところ、一人は足のところ に座っている。</p>
--	---

この箇所で、共通する語彙は網掛け部、及び類似する語句は点線による下線部である。

ここで共通する語は接続詞「そして」と、「白い衣」（「白い長衣」Mk/「白衣」Jh）のみである。

ここで先ずは、先の箇所での検討に従って女性達は複数であると想定する。次いで、その複数の女性達が墓の中に入ったのかどうかということに関して、マルコではこの箇所女性達はイエスの遺体に香油を塗ろうとしているのだから、遺体が横たえられているはずの墓の中に入るのが自然である。また、墓の中に入ることを前提としていたからこそ、女性達は墓から誰が石を転がしてくれるだろうかと心配していたといえる。しかし、ここではむしろ、ヨハネのこの後に続く物語部を想起したうえで考えを進めてみたい。

ヨハネのこの箇所マгдаラのマリヤムが見たのは、墓の石が取り除かれていたということのみであり、ヨハネにおいてこの部分でマリヤムが墓の中に入ったとは書かれていない。他方、ヨハネにおいては、これに続く箇所マгдаラのマリヤムの報告を受けて墓に向かった、ペトロともう一人の弟子が墓に入ったと記されている。即ち、墓に入るという行為については、マルコとヨハネで、結び付けられる主体が異なっている。このことから、墓に入るという行為は、「空の墓」の伝承の古層にあったともなかったとも判断し難いが、少なくともこの語に関連して物語上のバリエーションがあったということが想定されてもよいといえる。そもそも、最初にイエスの墓に入った人物を描くのであ

れば、それは極めて重要な事柄であるはずだから、ここで人物が食い違うのは伝承上不可思議であるし、編集上も望ましくないと考えられるとすれば、古層の伝承にあった人物を容易に書き換えることは出来ないししない方がよいであろうと思われる。これらのことから、敢えて想定するとすれば、「墓に入った」という表現は、編集句である可能性が高い。より無難な伝承句と想定してゆくならば、ここは、「墓に入った」という具体的な表現よりも、「見た」という表現のみを古層の伝承として想定するのが妥当ではないかと考えられる。

また、マルコの「ひどく肝をつぶした」はマルコの説明、即ち編集句と捉えられ、ヨハネの「白衣の御使いが二人、一人は頭のところに、一人は足のところに座っている」は、口伝の伝承としては詳細に過ぎるともいえる。更に、ヨハネにおいてはこの白衣の御使いは、マリヤムに対して「何故泣いているのか」(20:13a)と問いかけ、これに対してマリヤムが「主が取り去られました。どこに置かれているのかわかりません。」(20:13b)という記述が続くが、この一連の白衣の御使いとマリヤムの会話は、マリヤムが「イエスを見失った」即ち、「イエスは誰であるか」という信仰上若しくは神学上の問いに対する信仰若しくは認識¹⁸、イエスの現実の死である磔死によって自らの心のうちから失ってしまったということが象徴的に示された記述となっていると解釈されてきた¹⁹。従って、これらの内容を導く主体として登場する白衣の御使いは、ヨハネによる物語の展開即ち編集句であるということがほぼ明らかであると想定されてよいであろう²⁰。さらに、ここでヨハネに用いられる「御使い」という言葉そのものもすでに極めて神学的ともいえることから、ヨハネのこの記述は少なくとも伝承の発展した形における表現であり、伝承上の古層の表現は、マルコにあるように「一人の若者」であったと考えるのが妥当ではないかと思われる。

これらのことから、この箇所伝承の古層は以下のようなものであったのではないかと想定される。

18 但し、この時点ではまだ信仰上若しくは神学上の認識というよりも、イエス（という実存的存在）への信頼と表現した方が適切であるかもしれない。

19 またこの記述はさらに、そこから再度弟子たちの信仰及び神学的イエスの認識、換言すればイエスの復活という認識へと物語が展開されてゆく、復活を描く物語のクライマックスへの伏線であるといえる。

20 『新共同訳新約聖書注解Ⅰ』527 参照。

Καὶ εἶδον νεανίσκον καθήμενον περιβεβλημένον στολὴν λευκὴν

そして、彼女たちは、白い長衣をまとった一人の若者が座っているのを見た。

(4) Mk16:7 と Jh20:17 から

<p>16:7 ἀλλά ὑπάγετε εἶπατε τοῖς μαθηταῖς αὐτοῦ καὶ τῷ Πέτρῳ ὅτι προάγει ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν· ἐκεῖ αὐτὸν ὄψεσθε, καθὼς εἶπεν ὑμῖν.</p> <p>むしろ行って、彼の弟子たちとペトロと言え、『彼はあなたたちより先にガリラヤへ行く。そこでこそ、あなたたちは彼に出会うだろう』と。彼が〔かねて〕あなたたちに語った通りである。</p>	<p>20:17 λέγει αὐτῇ Ἰησοῦς· μή μου ἄπτου, οὐπω γὰρ ἀναβέβηκα πρὸς τὸν πατέρα· πορεύου δὲ πρὸς τοὺς ἀδελφούς μου καὶ εἶπε αὐτοῖς· ἀναβαίνο πρὸς τὸν πατέρα μου καὶ πατέρα ὑμῶν καὶ θεὸν μου καὶ θεὸν ὑμῶν.</p> <p>イエスが彼女に言う、「私にしがみつくのはよしなさい。私はまだのぼって父のところにいるわけではないのだから。私の兄弟たちのところへ行きなさい。そして彼らに言いなさい、『私は、自分の父のところ、あなたたちの父のところ、私の神のところ、あなたたちの神のところに、のぼってゆこうとしている』と」。</p>
---	---

この箇所で、共通する語彙は網掛け部、及び類似する語句は点線による下線部である。

この箇所でのマルコとヨハネに共通する語句及び表現は、この箇所全体の描写の分量に比して相当に少ないといえる。

マルコの『「彼はあなたたちより先にガリラヤへ行く。そこでこそ、あなたたちは彼に出会うだろう』と。彼が〔かねて〕あなたたちに語った通りである』との記述²¹、及びヨハネの「私にしがみつくのはよしなさい。私はまだのぼって父のところにいるわけではないのだから」また、『「私は、自分の父のところ、あなたたちの父のところ、私の神のところ、あなたたちの神のところに、のぼってゆこうとしている』と』との描写は明らかに両福音書記者による編集句であることが疑われない²²。

21 Mohr, T.A., Markus-und Johannespassion(AThANT 70),Zürich 1982 参照。

22 『新共同訳新約聖書注解 I』258-9、526-530 参照。

ここで、いずれにせよ女性がイエスの墓にいたある一人の若者から、兄弟たち若しくは弟子たちのところに行って告げなさいと語られるという内容は一致しているといえるが、その内容を表す語句に関しても、マルコでは、「弟子たち」と記され、ヨハネでは「兄弟たち」と記され、双方において一致していない。特にここでのヨハネの語句「兄弟達」はヨハネに特徴的な言葉づかいであるといえる。

また、先にも述べたように、この箇所は明らかに、イエスの顕現若しくは復活を記す後の箇所への話の展開部及び接続部として機能している。というのも、「墓からイエスの遺体が消失していた」という事柄から「イエスが復活した」という認識へと物語の筋が展開していくためには、後にイエス自らが顕現するという逸話が続くことを考慮するとしても、その逸話へと一層スムーズに読者を導くためにも、ここでイエスが復活したと告げるいわばナレーションの役割りを果たすともいえる一人の若者の存在が効果的に導入される必然性があるとも考えられるといえるからである。また、前述の通り、ここでは使用語句及び内容の双方において、マルコとヨハネによる一致点が極めて希少である。

これらのことから、この部分の記述は「空の墓」伝承の古層に本来属するものではなく、「空の墓」伝承を「顕現物語」若しくは「復活物語」へとつなげてゆくためにマルコ及びヨハネ双方の福音書記者によって双方の神学思想及び編集意図に基づいて編集されたものであるとみなすのが妥当なのではないかと考えられる²³。

ただ、マルコの「行って、彼の弟子たちとペトロとに言え。」もヨハネの「私の兄弟たちのところへ行きなさい。そして彼らに言いなさい。」も共に扱いが難しい。即ちここにこのような両者に類似する表現があるのだが、この表現は、イエスの磔刑の際に男弟子が皆逃亡していたという出来語及び物語の記述に対して、空の墓の最初の目撃者が女性であるという伝承及び物語の記述を踏まえて、それでも初代／原始キリスト教団のイニシアティブは男性によって担われるべき若しくは担われていたという状況或いは根拠を記す編集句として機能しているようにも思われるからである。更に、マルコにおいては前述のマル

23 Bultmann, R., Pesch R., 前掲書参照。また、Gnilka, J., *Das Evangelium nach Markus, I/II(EKK /1,2)*, Zürich/Neukirchen, 1978/1979(21986)、Lührmann, D., *Markus* 14, 55-64. Christologie und Zerstörung des Tempels im Markusevangelium, NTS 27(1981), S.457-474

コにおけるイエスの活動拠点であったガリラヤという地名が示唆され、ヨハネにおいては、「父のところへ登ってゆこうとしている」という表現によってその神学のクライマックスでもあるイエスの「栄光の時」が示唆されるという神学的文脈となっていることから、この部分が実際に古層の伝承にあったのかという点については、更に考慮が必要であると考えられる。

しかしながらここでは、上記の共通する語句及び表現の中から、マルコ及びヨハネにとって特徴的な言葉及び人物である「ペテロ」、「兄弟」という表現を除いた以下を、古層の伝承であった可能性があるものとして、一旦仮定することとした。

λέγει· ὑπάγετε καὶ εἰπὲ αὐτοῖς
彼は言う。行って彼らに告げなさい。

7. 「空の墓」伝承の古層

簡潔ではあるが既に検討してきたことから、「空の墓」伝承の古層は、以下のようなものであったのではないかとここで仮に想定したい。

λίαν πρῶτὴ τῆ μιᾶ τῶν σαββάτων ἔρχονται ἐπὶ τὸ μνημεῖον ἀνατείλαντος τοῦ ἡλίου.
週の初めの日、朝大変早く、彼女たちは墓へ行く。

καὶ ἀναβλέπουσιν ὅτι ἀποκεκύλισται ὁ λίθος
しかし、見るとその石が転がしてあるのが見える。

Καὶ εἶδον νεανίσκον καθήμενον περιβεβλημένον στολὴν λευκίην
そして、彼女たちは、白い長衣をまとった一人の若者が座っているのを見た。

λέγει ὑπάγετε καὶ εἰπὲ αὐτοῖς
彼は言う。行って彼らに告げなさい。

極めて短い簡潔な伝承といえる。しかし、当初の伝承はみな口伝であったということから考えると、この簡潔さは特段に不思議ではないといえるであろう。

前述の通り、この古層の想定は、現行のマルコとヨハネ福音書の「空の墓」の物語部から共通する語句や類似する語句に基づいて仮の試みとして行ったものである。手法上上記のように一旦想定したが、内容から検討するとするならば、上記の最後の2行については更に考慮が必要であるといえる。何故なら、先にも述べたように、内容からすれば、「空の墓」を女性達が目撃したという出来事の記述だけでは、イエスの遺体がどうなったのかわからないのみならず、復活という概念は生じ得ないといえるから、この物語から更にイエスの顕現及び復活の逸話を続けて展開し描くためには、イエスの復活を告げる誰かの存在が物語上更に要請され、その誰かが、「白い長衣をまとった一人の若者」であったと想定されることが可能であり、そしてそのためにこの人物の描写が加えられていると考えられるといえるが、それなら、この内容が本当に「空の墓」伝承の最古の形と言い得るのか、むしろこのような内容の2行よりも、「イエスの遺体が墓の中になかった」という内容の1行があるべきではないかとも考えられるからである。しかし、それらの内容は、マルコにおいては16:6bで、一人の若者によって「ここにはいない」と語られ、ヨハネにおいては20:2bで、マグダラのマリヤによって「彼らが主を墓から取り去りました。〔あの方を〕どこに置いたのか私たちにはわかりません。」と記されており、しかもマリヤムのこの言葉は、類似の言葉が三度繰り返されて記述される構図に基づいて、マリヤムが、イエスの存在の出来事の意味をイエスの磔死という現実の出来事によって心のうちに見失ったといういわばむしろ信仰上の危機が表現されたものであるとみなされる²⁴。従って、これらについては、語彙の一致もしくは現行の文脈からは最早辿ることが出来ないといえる。

8. 最後に

ここまで、マルコ福音書及びヨハネ福音書の「空の墓」伝承の古層を辿り、その古層を再構成する試みを行ってきた。そこから、この伝承に関して双方の福音書の語彙及び文脈の一致と相違に基づいてその古層に到達する試みはむしろ、部分的及び不完全にしかなしえないと確かめられたともいえる。

24 このような心理的危機状況から、再度心のうちにイエスの存在の全体的意味への認識、復活信仰が芽生えてゆくという状況が描かれているといえる。

しかし、このことを通して想定しえることがあるといえるのではないか。即ち、この「空の墓」伝承が、それ自体としては、極めて断片的であるといえるのにも拘わらず、何故伝承として必要でありまた重要なのか。それは、イエスの復活という事柄を成り立たせるためには、イエスの遺体が消失していることが不可欠であるからという理由のうちにその答えを見出すことが出来るものとも想定出来るであろう。イエスの顕現若しくは復活という出来事は、イエスの遺体が墓の中に存在しているそのままでは、たとえそれが信仰上のまた精神的に深いレヴェルの認識であるといったかたちで割り切られるという可能性を考慮するとしても、特に顕現に関しては、自然には成り立ち得ようがない事柄といえるのではないだろうか²⁵。では、それはイエスの顕現若しくは復活伝承を成立させるために創作された全くの架空の伝承なのかと考えると、やはりそれも蓋然性をもたない想定であるといえるのではないだろうか。イエスの遺体が消失したという出来事、少なくともその出来語を伝える伝承が先に存在してこそ、この伝承を基礎として、イエスの顕現及び復活という認識が現実実を帯びて、当時の人々の中に生じ、また成立し得たと考えられるのではないだろうか²⁶。

それ故、「空の墓」伝承は、それ自体としてその古層を取り出し、再構成することは極めて困難で不完全なかたちでしかなし得ないが、この伝承が当初より存在したからこそ成り立ちえた顕現及び復活伝承と相当に古い段階から密接なかたちで重なり合いながら、それぞれの福音書記者においてさらに信仰上及び神学上の編集意図を付与されつつ必要不可欠のものとして伝えられたものであり、むしろ歴史的出来事に接近しつつ信仰の認識の次元へと人々の精神をつないでゆく極めて貴重な伝承であると考えられるといえる。しかしながら、この古層の伝承と顕現及び復活伝承とが、どのように独立して存在したのか、また結びついていったのかという極めて難しい事柄について、今後なお一層の検討が要請される。

【参考文献】

- Nestle&Aland, *Das Neue Testament griechisch und Deutsch*, Deutsche Bibelgesellschaft katholische Bibelanstalt 2000
- *Münchener neues Testament Studienübersetzung*, Patmos Verlag Düsseldorf, 7.

25 佐藤研、前掲書 108-110 参照。

26 カンペンハウゼン『空虚な墓』蓮見和男・畑祐喜訳、新教出版社、1976 参照。

- Auflage, 2004
- *Neue Jerusalem Bibel Einheitsübersetzung mit dem Kommentar der Jerusalem Bibel*, 11. Auflage, Herder, Freiburg · Basel · Wien, 2000
 - 『新共同訳聖書』日本聖書協会 1993
 - 新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』岩波書店、2011年
 - Becker, J., *Das Johannesevangelium im Streit der Methoden (1980-1984)*, ThR 51 (1980, 1-78)
 - Brown R.E., *The Gospel according to John I/II(AB 29/29A)*, New York 1966/70, *The Death of the Messiah, Doubleday*, New York London Sydney Auckland 1994
 - Bultmann, R., *Das Evangelium des Johannes*. KEK 2. Göttingen, 1941. (10. Aufl. 1978)
 - Gnllka, J., *Das Evangelium nach Markus, I/II(EKK /1,2)*, Zürich/Neukirchen, 1978/1979 (²1986), *Das Evangelium nach Markus (Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament Bd. 2)*. Neukirchener Verlag, Neukirchen-Vluyn, 2002, *Johannesevangelium*. Echter-Verlag, Würzburg, 2004
 - Hengel, M., *Entstehungszeit und Situation des Markusevangeliums*, in: H. CANKIK (Hrsg.), *Markus-Philologie (WUNT 33)*, Tübingen 1984, S.1-45
 - Köster, H., *Einführung in das Neue Testament*, Berlin/New York, 1980
 - Lührmann, D., *Markus 14*, 55-64. Christologie und Zerstörung des Tempels im Markusevangelium, NTS 27(1981), S.457-474
 - Mohr, T.A., *Markus- und Johannespassion (AThANT 70)*, Zürich 1982
 - Pesch R., *Der Schluß der vormarkinischen Passionsgeschichte und des Markusevangeliums: Mk 15,42-16,8*, in M. SABBE(Hrsg.)
 - Schnackenburg, R., *Das Johannesevangelium, I/II/III/IV (HThK 4)*, Freiburg, 41979, 21977, 31979, 1984
 - Schweitzer, A., *Geschichte der Leben-Jesu-Forschung, 6*. photomechanisch gedruckte Auflage, JCB, Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1951
 - カンペンハウゼン『空虚な墓』蓮見和男・畑祐喜訳、新教出版社 1976
 - 佐藤研『悲劇と福音』清水書院 2001
 - 高橋虎/B. シュナイダー監修、川島貞雄/堀田雄康編集『新約聖書注解 I』日本基督教団出版局 1976